

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 宮川雄基 所属: 姫路市立書写養護学校 記録日: 2019年2月28日

キーワード: 肢体不自由、実態把握、観察、OAK、コミュニケーション

【対象児の情報】

・学年 小学1年生の男児

・障害名 ウエスト症候群（點頭てんかん）

・障害と困難の内容

4月。入学した小学1年生の児童と関わってみて、担当として様々なことに悩んだ1ヶ月だった。主な児童の実態としては、次のような物があげられる。

○発声はあるが発語がなく、ジェスチャーを使つての意思表示が難しい。

○提示した物を目で追うことは難しい。また、目の前で提示しても手を伸ばしたりする様子は見られない。

○両手は常に動いているが不随運動であるように思える。意図的な動きかどうかがわかりにくい。

○こちらの話しかけに対し、タイミングよく口を開けたり首を動かしたりすることも稀にある。しかし、話しかけている言葉を理解しているかどうかがわかりにくい。

○バギーを利用して、自分でこぐことはできない。ずり這いや寝返りは難しく、自分で行きたいところに移動することは難しい。

それらを踏まえた支援者としての困り感、それは次の③つである。

①児童は、発語がなく、ジェスチャーをすることが難しいため、誰にでも伝わるコミュニケーションをすることが難しい。

②同じ物を提示しても、児童の反応がその日・その時によって大きく違っていて、児童が何に意識を向けているのかがわかりにくい。

③なんとなく目で見ただけでは、表情や行動から児童の感情を読み取ることが難しいと感じている。

これらの課題に対して、観察の仕方を工夫することで、児童との確かなコミュニケーションが行えるのではないか、という仮説を立て、実践を行った。

・実施期間 4月～2月

・実施者と対象児童の関係 宮川雄基（担当）

【活動内容と児童の変化】

＜取り組みⅠ＞

目的 児童がどんな時にどんな反応をしているかを知る。

方法 どんな時にどんな反応があるのか、観察を実施しまとめる。

※魔法の言葉の参考事例で紹介されている (https://maho-prj.org/2017PRJ/lreports/C_城間知子_那覇特別支援学校.pdf) 沖縄県立那覇特別支援学校の城間知子さんが作成された表5を参考

結果 様々な場面での反応があることがわかってきた（表1参考）。

「全身の動きが増える」表出は、主にうちの風をあびるという場面でたびたび見られた。ほぼ毎回その反応であった。前もたれ椅子に15分ほど乗る際には、首や足など全身をくねらせ、声を出すという表出であった。

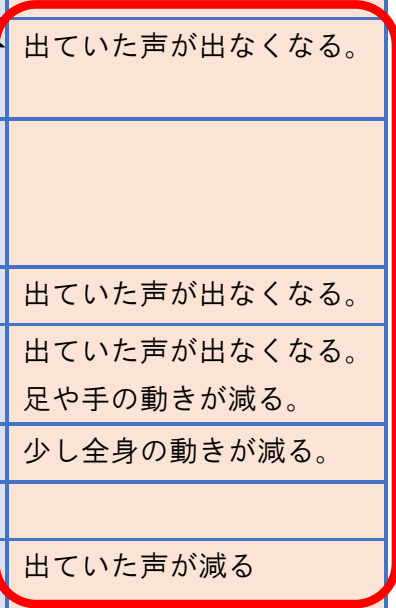
「一部の動きが増える」表出は、頭皮マッサージやリマック体操時、教師が目の前でiPadを操作している時等に見られた。

「動きが減る」表出は、額に手を当てられたり、抱っこをされたり、トランポリンに乗って揺れた時等に見られた。

表1 どんな時にどんな表出をしているか

どんな時に	どんな反応		
	全身の動きが増える	一部の動きが増える。	動きが減る。
頭皮マッサージ		眉間に皺を寄せ、首を振って嫌がる素振りをする	
うちの風をあびる	声が出る。笑顔になる。 手が激しく動く。 足が動く。		
額に手を当てられる			出ていた声が出なくなる。
前もたれ椅子に15分ほど乗る	首や足など全身をくねらせ、声を出す。		
立位台に乗る			出ていた声が出なくなる。
抱っこ			出ていた声が出なくなる。 足や手の動きが減る。
トランポリン		少し笑みが出る。	少し全身の動きが減る。
リマック体操		少し笑顔になる。	
目の前でiPadを操作する		目をやや大きく見開くことがある。 手や頭の動きが増える。	出ていた声が減る
????		口をチュチュチュとする。	気になる表出

注意を向けている
かもしれない？



考察 毎回同じような表出が見られる時はなかなかなかったが、うちわの風をあびる時はほぼ毎回同じ表出が出た。明確に表出が見られるので、今後児童の好きな物を見つけていたり、言葉での理解の度合いを探ったりする際のヒントとなるかもしれないと考えられる。また、「動きが減った表出」に関しては、不随運動で手や首が常に動いている可能性が高い児童にとっては、その物に興味を向けているかもしれない、今後の取り組みのヒントとなる可能性があると考えた。このように、いろいろな場面の反応をまとめることができ、児童の表出や反応を示しているものを探る手掛かりとなった。

表1を使ってみて…

こんなところが
よかったです！



表1を使ってみて感じたことは、2つある。

1つ目は、「動きが減る」という部分にも着目するようになったことである。この表を活用する前は、「この動きはどんな意味があるのだろう」というように、動きが増える部分のみに着目していた。しかし、「動きが減る」という部分にも着目できるようになったのは、活用していてよかった点である。(動きが減る部分についての考察は、後ほど記述を行う。)

2つ目は、表にまとめることにより、“横に見る(その事象だけを捉える)”見方だけでなく、「この前も動きが減った時があったな」というように、“縦に見る(他の時と比較する)”ということを意識するようになったということも、活用していてよかった点である。

また、逆に使いにくかったところとしては、メモしたものを、放課後に再度表に打ち直してまとめ直すということが、少々手間であったことが挙げられる。メモ(入力)したものがそのまま表に反映され、分析できるアプリ等あれば便利であると感じる。

また、この表を使い始めた当初、児童の反応が毎回同じではないときに、「この反応は、どう扱ってよいのか」と疑問に思った。表を横に見ていたからである。表を縦に見られるようになってから、その疑問はなくなった。

<取り組みII>

目的 チュチュチュという表出について考える。

取り組みをした理由：取り組みIをしていて「口をチュチュチュ」とする表出が気になった。「飲み物を飲みたくてチュチュチュとしているのかな」と思い、飲み物を飲ませたところ、全て飲み干す姿が見られたことから、「チュチュチュという表出」が意味することについて考察することにした。

実践方法 4つの可能性を考え、一つ一つ検証していくこととした。4つの可能性は次の通りである。

- ① たまたまその1回だけ飲み物を飲んだ。
- ② 口で遊んでいるだけ。
- ③ 喉が渴いた時のサイン。
- ④ 喉が渴いた時に出てくる自然な身体反応。

①の検証は、表出の時に飲み物を飲ませてみたところ、やはり飲み物をよく飲んだことが何度か見られた（後述）。別の機会にも「チュチュチュ」の再現性が見られたため、たまたま1回だけの偶然ではないと考える（ただ、いつも、いつまでもチュチュチュと飲み物の関係が確立しているわけではないのを周囲が自覚していくこともまた大切であると考え）。

②③④の検証は、口で遊んでいるだけなのか、喉が渴いたときのサインや身体反応なのかを調べてみた。これは、次の(2)つを行った。

(1) 仮に飲み物を飲ませてみて、反応の変化を記録する。

自発的に出るチュチュチュの意味について、考察を深めるため、フィードバックを与えてみて変化が起きるかを観察してみることにした。自発的なチュチュチュが見られたら飲み物を飲む時間とした、ということである。結果を表2に示す。

表2 月ごとの「チュチュチュ」と口を吸う表出が見られた回数

月	4月	5月	6月	7月	9月	10月
回数	0回	0回	2回	2回	13回	26回

見られ始めた

大きく増えてきた

4月や5月はこのような動きは見られなかったが、6月に入ると学校生活の中で、月に2回のペースで見られ始めた。9月に入るとその回数は増え、10月に入ると1日に1回は口をチュチュチュとするようになってきた。このように、児童の自発的な反応は安定して出るようになってきた。飲み物を飲む、という行為が、チュチュチュの表出を強化した可能性があると言えるだろう。

次に2つ目である。

(2) 自発の表出があった時とない時の、その後の飲む量の比較

(1)で、自発表出が増えてきたことを確認できた時、同時に、他の理由でこれらの表出が増えていることもあるのではないかと感じるようになってきた。そこで、チュチュチュという自発表出をしていないときにも、飲み物を飲むかどうか本人に聞いてみることにした。自発表出をした時はたくさん飲み物を飲むのだが、自発表出をしていない時に飲み物を勧めてみても一口飲んだ後すぐに顔を背けて拒否をしたりし、飲まないということがわかった(表3)。

表3 チュチュチュの自発表出をしたときとしないときの飲んだ量

日付	時間帯	チュチュチュの有無	飲んだ量
9/14(金)	9:10	有	1/4 くらい
9/19(水)	9:15	有	半分くらい
9/20(木)	9:10	無	一口
	11:20	有	半分くらい
	14:20	無	一口
9/21(金)	9:07	無	一口
	13:30	有	一口
9/25(火)	9:15	無	一口
	10:15	無	二口
9/26(水)	9:10	有	1/4 くらい
	11:43	有	1/5 くらい
9/27(木)	11:30	有	1/4 くらい
	12:30	有	1/8 くらい
9/28(金)	9:30	有	1/4 くらい
	10:50	無	飲まなかった
	10:55	有	1/8 くらい
	11:30	有	1/4 くらい
	13:30	有	一口

(1)、(2)の観察から、口のチュチュチュの自発表出は、飲み物を飲むことに関して変化するものであり、その後の水分摂取量に影響があるものであることがわかったが、サインなのか反応なのか(③なのか④なのか)ということの区分けをするには届かなかった。

<取り組みⅢ>

目的 チュチュチュの動きを意思の確認に使えるか検討する。

取り組みをした理由 飲み物を中断した時に、支援者が続きを飲むのか飲まないのかを聞き取るためのサインとして使えるのではないかと考えたからである。

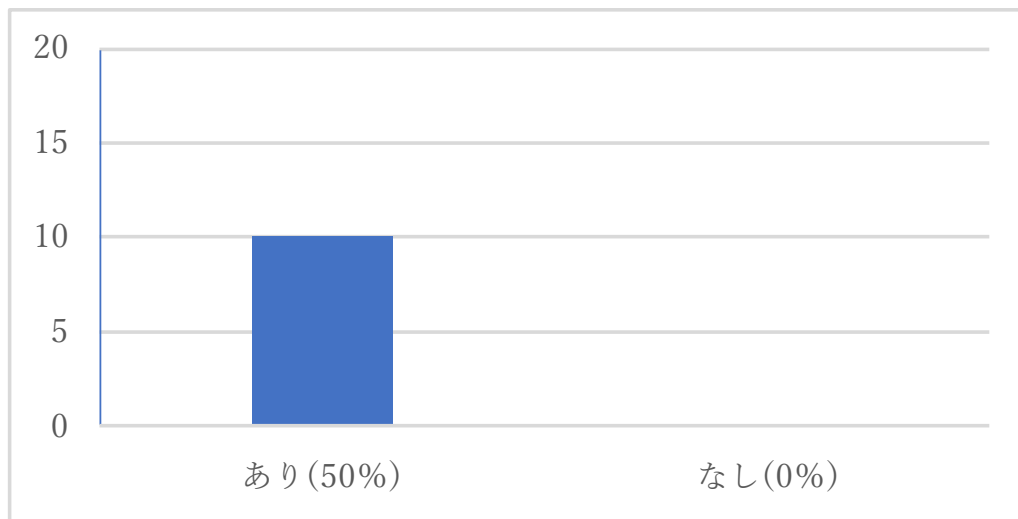
方法 魔法の宿題で事例が紹介されている沖縄県立那覇支援学校の赤嶺太亮さんの実践

(https://maho-prj.org/2015PRJ/lastreports/C_赤嶺太亮_沖縄県立_那覇特別支援学校_最終報告書_最終稿.pdf#search=%27%E9%AD%94%E6%B3%95%E3%81%AE%E5%AE%BF%E9%A1%8C+%E8%B5%A4%E5%B6%BA%27)を参考に、飲み物を中断した時の表出について観察してみることにした。手続きは以下の通りである。

- ① 飲み物を少量飲んだ後中断し、児童の表出を待つ。
- ② 1分ほど待ち、口のチュチュチュなど、飲みたそうな表出が見られたら飲ませる。
- ③ 顔を背けるなど、飲みたくなさそうな表出が見られたら止める。
- ④ 反応が見られなければ、もう一口飲ませて中断し、児童の表出を待つ。
- ⑤ 2回待っても反応が見られなければ、飲み物を飲むのを止める。

結果 1回目の飲み物中断時に口の表出があったときには、2回目の中断時には50%の割合で、口の表出が見られたのに対し、1回目の中断時に自発的な口の表出が見られない時は、2回目の飲み物中断時に口の表出が見られたのは、0%であった。自発的な口の表出が見られない時は、そもそも飲み物を飲もうとしなかった。結果を表4に示す。児童はどのような飲み物を飲ませてみても、一口は飲むのだが、味がわかるとそれ以上は飲もうとしないので、一口飲んで飲みたくない時は、それ以上飲もうとしていないと考えられる。

表4 中断したときの表出回数（チュチュチュとする仕草があるときとない時の比較）



考察 飲み物を中断した時の口の表出については、続きが飲みたい、という気持ちが現れていると考えて良いのではないかと考えている。

<ここまでの考察>

始めは、チュチュチュは、喉が渴いたことを示すサインではないかと考えたが、私たちが考えてみると、体の水分が減り汗をかいているのと近い、伝達の思いを有していない身体反応である可能性も拭いきれないと感じる。であるならば、チュチュチュを「飲みたい要求」と捉えて飲ませることはやりとりのズレを生じる可能性がある。チュチュチュという表出は、喉が渴いた時の身体反応かもしれないと考え、あらためて本人に飲み物がほしいのかどうかを聞いてみるのが重要であると考え。ただし、言語理解に困難さがあり（後述する）、

「飲む？」と言葉で聞くだけでは飲み物を想起できないと考えられるため、「少し飲ませてみたあと、もう一度飲むか、児童に聞いて確かめる」コミュニケーションが良いだろうと考えてみる。そうすることで、飲みたい飲み物を選ぶことができるようになったり、これから児童が異なる表出をしたときにも対応できるコミュニケーションを支援者が提供できたりすることに繋がっていくのではないかと考えている。

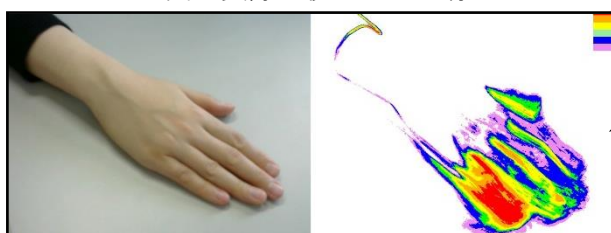
<取り組みⅢ>

目的 児童にとって言葉はどのくらい有効か探る。

方法 OAK を使って、どのくらい言葉で見通しを持たせることができるか、調べてみた。OAK とは、重度重複障害などの随意的な動きをとらえることが難しい人の反応を可視化できるアプリである。(図 参照)



図 実際に使っている様子



動きが比較的少ないところは青く、多いところは赤く、それぞれ色が変わっていく。

観察の仕方は、①ビフォー、②「扇ぐよー」という声かけ、③活動、④アフターの4段階で行った。4段階にした理由としては、③で動きが増えることは予想されるが、②の声かけで、①や③と比べてどのような変化が見られるかを探るためである。また、一つの段階を20秒ごとに区切っていった。児童がそれぞれの反応を受け入れるのに、10秒ほど時間がかかるためである。

場面としては、安定して反応が見られたうちで扇がれるという場面を選んだ(表5)。

表5 うちわで扇がれる(立位台姿勢)

①ビフォー (20s)	②「扇ぐよー」と何度も伝える (20s)	③うちわで扇がれる (20s)	④アフター (20s)

結果 ③の前に②で言葉がけをしてみても児童の反応に違いが見られず、また、①と②に関しても、違いが見られなかった。繰り返し行っていくと何か反応に違いは出てくるのでは?とも思ったが、数週間しても変化が見られなかった。これらより、児童は、今はまだ、言葉でやり取りをすることは難しいであろうと考えることができる。

考察 これらの結果からも前述の「一口飲んだ相手の様子や、中断した時の動きの変化を観る」という方法が対象児童にとって有効である可能性が高いと言えそうである。

OAK を使ってみて…

こんなところが
よかったです！



動きが可視化できるので、目で見て不確かだった部分がわかるようになったところが、何よりよかった点である。

また、OAK を使うときに「声に反応しているのか」「物を見て反応しているのか」と考え、「じゃあそれがわかるためには OAK をどう使えばよいか」というように、一つ一つの刺激に対する観察の仕方を整理して考える意識が持てるようになったところがよかったところである。OAK を実際に使う前は「とりあえず OAK を使えば簡単にわかる」と思っていたので、観察の仕方を意識できたという点がよかった。

逆に、難しかったところとしては、OAK で撮る画像の枚数が多くなり、分析や整理に時間がかかったという点が挙げられる。画像を撮ったときにそのまま表にしてまとめるアプリ等があれば便利であると感じる。

また、児童がどのような物に意識を向けているのか、再び城間さんの表を元に探ってみた。その結果、手で袋や紙の感触を感じたり、音が流れたり、揺れを感じたりする場面で、身体の一部の動き（首の動き）が減少することがたびたび確認できた。これらを元に児童とのコミュニケーションの手がかりになるものが他にもないか、今後探っていくこととする。

【まとめ】実践の結果、わかったこと4点

1 点目、児童が自発的に口をチュチュチュとするのは、喉が渴いたことを示す身体反応である時もあることがわかった。また、飲み物を中断した時に口をチュチュチュとするのは、続きが飲みたいことを示すサインとして使うことができると考えている。

2 点目、自発的に口をチュチュチュとする反応があったときには、少し飲ませてみて、もう一度飲むか児童に聞いて確かめるコミュニケーションが大切である。

3 点目、飲み物を続けて飲むか飲まないかを聞き取るやりとりで行った、活動の中断に対する反応の違いから意思を読み取るという方法は、対象児童とのやりとりの有効な方法であり、今後広げていける可能性を感じた。つまり、他の場面や活動においても、少し活動を体験して中断し、体のどこかに表出される反応の違いで、もう一度行うか児童に聞いて確かめるコミュニケーションが成立するかもしれないということである。

4 点目、児童は、現在言葉でやりとりをすることは難しいかもしれない。しかし、感触や音、揺れなどに対して児童が意識を向けていることが観察により証明できる可能性が出てきた。

また、上記のような児童の反応を観察して大切にしながら行うコミュニケーションは他の場面や児童の他の表出に関しても児童の気持ちを正しく読み取れるような可能性を感じる。今回の実践のような観察を大切にしながら行うコミュニケーションを引き続き行っていくことを、今後の課題としたい。